

3. 首都ジャカルタ

(1) 人口

1020万人(在留邦人12500人)

(2) 意味

「ジャカルタ」とは「輝かしき勝利」を意味する。

(3) 現在の様子

インドネシア共和国の首都で、政治・経済・文化・教育の中心地として終日活気がみなぎっている。また、街にはとにかく人と車とオートバイが多く、交通渋滞は日常的に起こっている。

(4) 三つの地区

ジャカルタはオランダ植民地時代当時の面影を残す北部、旧市街地邸・諸官庁・ホテル・デパートなどの高層ビルが林立する中心部、そして在留外国人たちが多く住み、日本食スーパーマーケットのある南部と、大きく三つに分けることができる。

(5) ジャカルタ中心部

近代的なビルが林立し、広い道路を多くの車が走っているジャカルタ中心部。しかし、一步裏通りに入ると貧しい人々の家々が並び、裸足で歩く人も見かける。貧富の差が激しく、高級車に乗っている人もいれば、交差点で物乞いをしている人もいる。この国の光と陰を凝縮した街、それがジャカルタである。

4. ジャカルタ日本人学校 紹介

(1) 学校紹介

世界でも有数の規模を誇る日本人学校として今年で45年目(1969年創設)。今年についても1200名を超える児童・生徒が学んでおり、学級数も小学部30クラス(全学年5クラス)、中学部9クラス(全学年3クラス)。年々児童・生徒数も増加傾向にあることで、国内の好景気を実感できる。

校舎環境は素晴らしく、校庭は小中学部各1面(天然芝)。プール、体育館も小中別。中学部体育館については、式典対策

でエアコンが設置されている。小学部低中学年・高学年・中学部と三つの棟で構成され、屋根付き・吹き抜けの設計により、アトリウムでの小集会も開催できるなど、校舎は充実している。施設・設備や教材不足も覚悟の在外教育施設。そんな不安もなく、完璧な設備と豊富な教育物資に囲まれている。校地内には、国内でも有名な植物園以上に数多くの種類の植物が植えられており、さまざまなフルーツや珍しい花や木も見ることができる。また、日本ではお目にかかることもないようなトカゲや蝶も教室に入ってくることも少なくないなど、自然にも恵まれた環境である。

(2) 特色

インドネシアの宗教的な特色ともいえる朝の早さ(ムスリムの4時のお祈りの関係)もあって、世界一とも言われる“交通渋滞”を避けるために早めの行動が求められる。ちなみに、教職員の出勤完了はおよそ6:30。始業は7:35、企業の就業終了時間前に帰宅させるため15:00にはバス発車も終り、放課となる。

総合的な学習の時間では、インドネシア理解教育として現地校との交流や現地施設の見学、自然体験など、ここでしかできない教育活動に力を入れている。

また、在外教育施設としての外国語教育は、英会話とインドネシア語を毎週各1回行っている。小学部6年生はバンドン、中学部2年生はバリ島への修学旅行を実施することによって、地域(島)による特色あるインドネシア文化にも触れる。南国ならではの水泳授業も1年中を通して行っており、真っ黒に日焼けした子どもたちは、ほぼ全員が泳ぐことができるほど。



(3) 進路指導

日本には全く想像がつかない世界・日本全国規模の受験先。インターナショナルスクールを含み、海外設置校、現地校など、選択は多岐にわたる。単身アメリカに渡ることになる慶応義塾ニューヨーク校、東南アジア圏の在外教育施設の受け皿として代表される進学校の早稲田渋谷シンガポール校といった大学付属に進学する生徒も少なくなく、現地インターナショナルスクール（ジャカルタ、オーストラリア、シンガポールインターナショナル校）へ進学する生徒も年々増えている。国内国公立へはおよそ25%。他は国内私立国立高校50%といった状況。多い生徒では10校近くの高校を受験する。

12月で3年間の教科書を終わらせ、3学期は日本へ帰国して受験対策、3学期は中学部3年生の登校者は数名、といった日本人学校特有の状況が見られる。

(4) 学校行事

ア 体育祭

一年で最も大々的な行事となっている体育祭。小学部と同日開催ということで、ジャカルタに住むほとんどの日本人会会員が集まると言っても過言ではないほどの盛況ぶり。私自身も3年目に指導をすることとなった「組体操」。日本では「危険」ということで、なくなりつつある演目をここでは継続させている。中学部女子は、実行委員創作によるダンスを発表する。応援合戦も行われていて、2013年には5色対抗。小1から中3までの縦割りでの団が結成され、小学生を中学生が指導することにも大きな意味がある。



イ JJSフェスティバル

小学校の「学習発表会」と中学校の「文化祭」の融合とも入れる行事。中学部では「合唱コンクール」も行われる。日本人会の指導で神輿も行われている。中学生と小学生が交流することで、コミュニケーション能力を養っている。これも、幼小中学校が同じ校舎（敷地）にいることの利点と言える。



ウ 日本インドネシア友好親善スクール

現地交流との親善行事。お互いの実行委員会が1日の活動を企画する。簡単なゲームをしたり、創作活動を行ったり。おぼつかないインドネシア語でも交流をすすめ、最後は卒業生による作詞・作曲のオリジナルソング「プルサハバタン(友好の意)」を全員で合唱する。



(5) 勤務状況

教職員数

日本人今教諭	57名	(文科派遣34人、維持会採用23名)		
英会話	9名		特別支援	2名
現地語	5名		図書館司書	1名
事務	25名		用務員	30名以上



5. 最後に

不安な気持ちも拭えないままジャカルタ日本人学校での勤務がスタートしたが、今は熱意さえあればどんな教育活動も可能なのが在外教育施設であると感じる。3年間行った教育活動について全てを報告することはできないが、様々な挑戦ができたのが大きな財産となった。職員室では、全国から集まる仲間と議論し、今までの過去の慣例を踏襲することを良しとせず、常に新たなことに挑戦、創造していくことは実に楽しいものだった。残念ながら、学級・教科経営等の最低限の仕事だけをこなし、長期休業日の海外旅行を楽しみに勤務する教員がいるという現実もある。しかし、我々の職務は目の前にいる子どもたちのために何が出来るか、今しかできないことは何なのか、これに尽きると思う。

今後も、これから海外へ派遣される先生方の創意と熱意により、在外教育施設でのますます充実した教育活動が展開されることを願っています。